

秋の彼岸によせて

平成三十年九月 大乘寺 長老 岡 光俊

この「秋の彼岸によせて」を書くために、今年の春の彼岸の書き出しを見て驚きました。「今年の一月、二月は、京都市内でもマイナス四度の日が数日続く異常気象となり、水道水凍結による水道管損傷により、その後の生活に大きな影響が出た地域も多いと聞いております。」と異常気象だったのだと改めて思い起こした次第です。酷暑、いや地獄の暑さと言う意味で酷暑と表現される方もおられますが、正に熱中症で命を落とされる方がこれ程多くなると、酷暑の表現そのものの様相であったと言えましょう。其れに加え、豪雨、地震、巨大台風襲来と、日本全国、癒える間もなく次々と天災が襲って来ている昨今です。

また自然の生態系にも大きな異変が起きていると言われているいます。蜜蜂の減少は、今後の地球規模の生態系異変に大きく関わりと分析する学者も現れています。生態系はどんな小さな生き物でも、死滅すると一気に全生命体が死に向かうこととなります。豪雨の元になる雲の生成も、近年、宇宙からのエネルギーが大きく起因していると言う学者も現れて来ました。地球温暖化のメカニズム、オゾン層の破壊によるものと同じ原因と云うこととなります。皆様の中にも地球の異変に危機感をお持ちの方も多いと思います。

人は此の地球に喜んで頂けることを何かしてきたでしょうか。人類の歴史は、戦争の繰り返し、我のぶつかり合い。家庭にあっても、職場にあっても、個人にあっても。

地球の繊細な営みを感じ取れない横柄な人間の今日までの行動。

戦争に勝つための原子爆弾、水素爆弾の限りない実験と使用。どこから見ても、地球にとって人類の存在は大きな負の存在でしかないということだ。

今の状況を変えるために何が出来るのでしょうか。争いを無くすことから初めて見ませんか。我を振り回し、我を通したい、独りよがりの考えである自分を改めないで和は生まれません。個人個人の心が和にならなければ、もはや、この繊細な地球に人類は自らが居場所を失う事となるでしょう。他に何かを求めめるのではなく、自分の考えを一人一人改める時期と感じます。自然に耳を傾け、地球に問いかけ、人間以外の総ての生きとし生けるものに見習い、自然に添い、地球に身を置かせて頂いていることを深く感謝し我を出さず、その様な生き方を今日からでも実行する事で、それぞれ皆様が何かに気付かせて頂けると想います。

彼岸とは、今まで考えたことも無く、気付こうともしなかった我「が」の岸から、気付きの岸へと向かうこと、すなわち、小さな我の世界から宇宙の成り立ち、地球の事に目を向け、一人一人が地球に身を置かせて頂いていることに、深い感謝を持ち、自然に頭を垂れる心を皆が持てる事が、彼の岸に向かうというものです。三千年前からお釈迦様が訴え続けて下さっていた意味が、今皆様にやっと届けられたのではないのでしょうか。

平成の時代を終えようとするこの時期に、我々人類への、宇宙からの問いかけに、ご先祖様共々、お釈迦様の教えをゆっくり紐解き、此の危機を乗り越える方法が示されている佛の智恵を解決の糸口を見いださねばならぬ時と想わせて頂いております。先祖への思いは、我が身を救う鍵、我「が」のみの心で、周りも己も救われる筈は無

し。子孫の幸せは、先祖が握っておられると説かれています。

秋の彼岸、子孫共々の墓参の大切さ尊さを体験して頂きますようお願い申しあげ、ご参拝お待ち申しあげております。

合掌